

初期美空映画の特徴について

——役柄とパターンに関する一考察——

齋藤 完

Characteristics of the Early Movies of Hibari Misora

SAITO Mitsuru

(Received September 24, 2010)

1. はじめに

本稿に先行する「美空ひばりの普及と初期映画の関係」では、映画作品中における美空ひばりの歌唱行動は物語に組み込まれている可能性を示唆し、さらには映画は美空ひばりを普及させたのみならず、観客が彼女や彼女の歌を受容する際の枠組みをも提供していたと推察した。

ここでは美空ひばりが出演した初期映画の内容を具体的に検討したうえで、歌唱行動との関連を明らかにしたい。

2. 先行研究の概観

美空ひばりが出演した映画の内容を分析した研究論文には、小川（2008）や板倉（2009）のものがあるが、いずれも本研究が対象とする時期よりもあとに作られた作品（彼女の異性装時代劇）について論じるのが主眼となっている^①。とは言うものの、後者においては初期映画をも含む時期に関して次のような記述がある。

ひばりが演じた役柄の特徴を一言で言えば、親・兄弟や庇護者に対する愛情表現は存在するが、異性に対する恋愛感情の表現を必要としない役であり、思春期に達する前の「子役」としてキャスティングされていた（同前：58）。

そして、美空が「子役」としてキャスティングされたのは、親の不在によってもたらされた「不幸な境遇にある子供」の役であるとしている。

板倉がこの指摘をする際に参照した「ひばりの十年とその役割」（柳 1958）を読むと、親の不在とあわせて、ほかの特徴も示されている^②。

^① ほかに太田米男（2003）による「美空ひばりの映画『青空天使』（1950）について」があるが、これは同作品のフィルムを発見・復元したことに関連して、作品紹介が中心となっている。

^② 音楽評論家の油井正一（1958）も、薄幸な「境遇にめげず、唄の天分を生かして成功するが、親を思い孝心を生かして成功するが、親を思い孝心を発揮して両親の不和をまとめる。まことに日本の庶民的な生活感情に訴えられている」と指摘しているが、これが掲載されたのが『ジューク・ボックス』誌の1958年6月号であることを考えると、柳の記事（『キネマ旬報』1958年4月下旬号）を参考にしたことが考えられる。いずれにしても映画に関しては柳と内容的にほぼ同じである。

ほとんどが、利口な忍耐強い子供で、いかなる苦しみも小さな肩にせおってじっとこらえて切りぬけ、経済的にも精神的にも力になって親を助け、両親の間をまるくおさめる。つまり親思いの親孝行者のひばりのいじらしさとすばらしさが強調されている。また、人のためになる働きをもする感心な子だ。その上、まれにみる天分があり、それが成功をもたらす力となる (64-65)。

映画評論家の川本三郎は「働き」に関してさらに具体的である。

美空ひばりの映画にはある共通のパターンがある。貧しい女の子がいる。たいていの場合、親がいない。いても病気だったり、失職していたりする。それで女の子は、働こうとする。幸い彼女は歌がうまい。近所にギターを弾く気のいい流しのおじさんがいる。このおじさんと組んで歌を歌う。その歌が大変な人気を呼んでハッピーエンディングになる。

たいていはこのパターンで物語が進行していく。貧しい女の子にとって歌が労働であることが明確にされている (1993: 339)。

その一方で、井上ひさし (1990) は「ぼくたちみたいに施設にいるような子供にとっては、夢のようなストーリーでした」と述懐しつつ、上の三人とは温度差のある「パターン」を指摘している。

ひばりさんが演じ続けたのは、不幸な環境にしながら、歌を歌って他人や自分を励まし、苦労に苦労を重ねたあげく、他人も自分も幸せになる、というパターンでした (同前: 9)。

あるいは、映画評論家の山根貞男。『悲しき口笛』評において、上記とは異なる「筋立て」を示している。

登場する小さな少女は、歌もうまいが演技も抜群で、兄を探してさすらう孤児の悲哀をじつに素朴に、みごとに演じきる。(中略) 本作の成功により、少女が肉親を求めてさすらうという筋立ては、以後、ひばり映画の定番となった (1990: 215)。

以上の差異からも察せられるとおり、作品を一つずつ見ていくと、それぞれが示す「パターン」なり定番の「筋立て」なりに合致しない作品の存在に気がつく。たとえば、『鞍馬天狗角兵衛獅子』や『月形半平太』で「親孝行者のひばりのいじらしさとすばらしさが強調」されることはないし、『父恋し』や『ひばりの子守唄』などで美空が「労働」することはない。『泣きぬれた人形』では「他人も自分も幸せになる」というわけではなく、『母を慕いて』や『あの丘越えて』は「少女が肉親を求めてさすらうという筋立て」というわけではない。

果たして、これまで指摘されてきたパターンは、傾向としてどのくらい妥当なのだろうか。そもそもパターンと呼べるものはあるのだろうか。

3. 本研究の目的

本稿は、まず、美空ひばりが出演した初期映画における役柄に関する共通項を明らかにしたうえで、映画の物語展開上の傾向を示し、さらにそれらと歌唱場面の関係を表わすことで、初期映画の特徴を導き出すものである。

4. 初期美空映画の特徴

(1) 役柄

美空ひばりが演じた役は幅広い。

のど自慢に出演する少女、河童の女の子、子だくさん一家の末っ子、浮浪児、悪の一味にさらわれる子どもの友だち、本人役、角兵衛獅子の少年、若武者に恋心を抱く舞妓……^③。

これらの多様性に目を奪われてしまうと、傾向を把握することは困難になる。

そこで、本稿に先行する拙稿「美空ひばりの普及と初期映画の関係」において指摘した、「出演率が二割未満の作品」では「歌うことを主とするという傾向」に着目し、対象を美空の出演率が二割以上の作品（すなわち、演技に〔も〕力点が置かれている作品）に限定してみると、一定の傾向が現われてくる。以下、これらの作品は美空が主演ないし主演級の扱いを受けているものとみなし、「美空映画」^④と称して論を進めていきたい。なお、映像では確認できなかった

【表1】美空映画における美空ひばりの家族状況

作品名（公開順）	① 作品冒頭での家族状況	② 家族状況の変化
①ラッキー百万円娘	親なし	父の出現
②悲しき口笛	親なし	兄の出現
③おどろき一家	父なし、母に捨てられる	母と再会
④憧れのハワイ航路	親なし、姉と二人暮らし	母の出現
⑤放浪の歌姫	両親が行方不明になる	両親と再会
⑥青空天使	父なし、母と逸れる	母と再会
⑦東京キッド	母子家庭、父の出現、母と死別	父と再会（二度目）
⑧とんぼ返り道中	親なし	母の出現
⑨父恋し	父なし、祖父と二人暮らし	父出現するも死別
⑩泣きぬれた人形	親なし、兄と二人暮らし	兄一時不在、再会、死別
⑪鞍馬天狗 角兵衛獅子	親なし	親なし
⑫母を慕いて	親なし、養父母	母の出現と死別、父の出現
⑬ひばりの子守唄	父母離婚状態	父母復縁
⑭あの丘越えて	母なし、婆やと同居	父・継母出現、同居
⑮陽気な渡り鳥	親なし、養父母	父の出現
⑯月形半平太	不明	不明

③ 詳細は巻末の一覧表を参照のこと。

④ ただし、『唄祭り ひばり七変化』は既存の映画作品から歌唱場面だけを抜き出して作った作品なのでこれから除く。また、資料的裏づけはないが『ヒットパレード』も同様とみなしてここには含めない。

だが、台本やプレスシートから『おどろき一家』『放浪の歌姫』『青空天使』での出演率も二割以上であることが推察されたので、これらも美空映画として分析の対象に加えている^⑤。

表1からも明らかなように、美空映画に顕著な傾向は、その冒頭において彼女に与えられた役柄である。それを単純に言えば、血の繋がった親（両親、あるいは片親）のいない子ども役となる。つまり、美空映画は、親のいない子どもの物語として始まるのである。上に示した16作品における冒頭の設定で、両親がいない場合が9作品、片親がいない場合が6作品となっている（詳細は巻末資料参照のこと）。

(2) 物語の展開におけるパターン1

こうした役柄の設定は、「いなくなった人」と再会したり（③⑤⑥⑦⑩）、あるいは「いないはずの人」が現われたり（①②④⑧⑨⑫⑬⑭⑮）などといった物語の展開を可能にしている（表1の⑧参照。詳細は巻末資料参照）。さらなる展開につながらないのは二例（⑪⑯）であり、例外的なケースであると言うことができよう。もちろん、物語の展開は単純に「再会」や「出現」という言葉では表現できないものもあり、たとえば便宜的に前者に分類した『⑦東京キッド』は、「父の出現→ひばりの失踪→父と再会（あるいは再出現）^⑥」という展開となっている。

(3) 物語の展開におけるパターン2

物語の展開としていまひとつ指摘したいのが、(1)で言及した冒頭での役柄（表1の④）、あるいは(2)で示した家族状況の変化（表1の⑧）が、作中の美空の行動に対する理由づけとなっている場合が多いということである（表2参照。詳細は巻末資料参照）。

美空の行動を大きく分けると、働くこと（④）と、他人と共同生活すること（①③）になるのだが、この両者を兼ねるという場合が最も多い。両者を兼ねる場合は、さらに、共同生活が先行するもの（②⑤⑥⑦⑩）と、労働と共同生活がほぼ同時に始まるもの（⑧⑪⑫⑮）に大別される^⑦。たとえば『②悲しき口笛』では、美空は孤児という身の上で、それを不憫に思った父娘のバラックで共同生活を営むようになる。美空が働き始めるのはその家族が窮状に陥ってからである。一方、『⑮陽気な渡り鳥』では、養父母から邪魔者扱いを受ける生活を脱するために、旅芸人の一座に加わり、労働と共同生活が同時に始められている。

(4) 物語の展開におけるパターン3

以上の物語展開上の特徴は、じつは歌唱場面と密接な関連がある^⑧。

^⑤ 台本によれば、『放浪の歌姫』『青空天使』における「美空が出演する場面数/全場面数」は、それぞれ「52/144」「45/83」である。また、『おどろき一家』の台本は未読であるが、プレスシートに「出演者は入江たか子 美空ひばりを中心に<中略>喜劇俳優がとりまき」とあり、小型ポスターにおいても入江と並んで主演扱いであることが判明したので、これも美空映画としてみなすことにした。

^⑥ 具体的には「病身の母と二人暮らしのところへ蒸発した父が現われるが、母は父を許さないうまま世界する。美空扮する娘は母の遺志を継いで父を拒絶し姿を消してしまう。その父は娘を探し続けついに娘を見つけ出す」という筋立てである。

^⑦ ただし、『⑧とんぼ返り道中』では、母の出現と直接的な因果関係を結ぶのは「旅立ち」という行動で、労働と共同生活（旅芸人の一座）のきっかけとなるのは、道中で旅費をなくしたことにある。また、『⑫母を慕いて』では、養父母のもとからそれまで見たこともなかった実母との生活へという変化を「他人と共同生活」の一バリエーションと捉え、その後におこなわれる舞妓としての活動は労働とみなして、ここに分類した。

^⑧ 物語の進行と関連が薄い歌唱場面も存在する。たとえば、旅などの移動中で鼻歌（にしては、はっきりと歌っているが）を歌ったり、悲しみを歌で表現したり、団樂のひとつときとして歌ったり、などである。

【表2】美空ひばりの家族状況（表1の①/表1の②）と関連する行動

作品名（公開順）	家族状況、又はその変化	家族状況に起因する行動
①ラッキー百万円娘	表1の①	他人と共同生活
②悲しき口笛	表1の①	他人と共同生活→歌で見舞金稼ぎ
③おどろき一家 ^⑨		他人と共同生活
④憧れのハワイ航路	表1の①	花売り娘
⑤放浪の歌姫	表1の①	他人と共同生活→歌手
⑥青空天使	表1の①	他人と共同生活→歌手
⑦東京キッド	表1の①	他人と共同生活→流しの歌手
⑧とんぼ返り道中	表1の②	他人と共同生活／旅芸人
⑨父恋し		特になし
⑩泣きぬれた人形	表1の②	他人と共同生活→歌手
⑪鞍馬天狗 角兵衛獅子	表1の①	他人と共同生活／大道芸人
⑫母を慕いて	表1の②	他人と共同生活／舞妓
⑬ひばりの子守唄	表1の①	復縁させようと奔走
⑭あの丘越えて		特になし
⑮陽気な渡り鳥	表1の①	他人と共同生活／旅芸人
⑯月形半平太		特になし

【表3】物語の展開と連動している歌唱場面

作品名（公開順）	再会の契機	経済行為	他人との交流	その他
①ラッキー百万円娘			○	
②悲しき口笛	○	○	○	
③おどろき一家				
④憧れのハワイ航路		○	○	
⑤放浪の歌姫		○	○	
⑥青空天使	△	△		
⑦東京キッド	○	○	○	
⑧とんぼ返り道中		○		
⑨父恋し	○			
⑩泣きぬれた人形	○	△	○	○
⑪鞍馬天狗 角兵衛獅子		○		○
⑫母を慕いて		○		
⑬ひばりの子守唄				
⑭あの丘越えて		○	○	○
⑮陽気な渡り鳥		○/△		
⑯月形半平太		○		

^⑨ 歌唱場面についての詳細は不明。

具体的には、美空の歌声が「いなくなった人」や「いないはずの人」との再会・出現のきっかけとなったり（たとえば『⑨父恋し』では美空が口ずさむ歌によって、父が彼女を自分の娘と認識する）、直接的・間接的に収入をもたらせたり（『⑤放浪の歌姫』では美空が歌手として報酬を獲得し、『④憧れのハワイ航路』では花売り娘の美空が自らの歌によって花の売り上げを伸ばす）、他人との良好な関係を構築したり（『①ラッキー百万円娘』では居候先の主人と歌で交流を図っている）、という機能である（表3参照。詳細は巻末資料参照）^⑩。換言すると、本稿に先行する「美空ひばりの普及と初期映画の関係」で可能性として示唆したとおり、歌唱行動が物語に組み込まれているのである。

5. まとめ

以上から、美空映画の特徴を要約すると次のようになるだろう。

- ・ 血の繋がった親（両親／片親）のいない子どもという役柄
- ・ 親との再会／親の出現という展開^⑪
- ・ (子どもによる) 労働／他人との共同生活という展開
- ・ 物語の展開に組み込まれた歌唱場面（再会の契機・経済行為・他人との交流）

極論から言えば、これらの特徴——単独であれ複合的であれ、具体的であれ抽象的であれ——とそれに対する解釈が、美空ひばりとその歌を受容する際の枠組みの一つとなるのであろう。

もっとも、「2. 先行研究の概観」で見たさまざまな見解のように、これらの何に注目するかについて個人差があるのは当然のことであり、同様に、着目した特徴をどう捉え、美空ひばりをどう受容するかについてもまたそれぞれである。

また、枠組みとなりうるのは映画の内容そのものだけとは限らない。

美空ひばりに出逢ったことの思い出をもう一つ書きとめておきたい。同じく孤島の小学生であった頃の話である。潮風の吹き込む校舎の外で、これまで快調に音をたてていた発電機の音が次第に低く途絶えがちになる。食い入るように見つめていた画面が薄灰色にはやけ、トーキーの音が間延びしてくる。やがて発電機は止まり、場内は闇につつまれ、途端に島の大人たちの吐息が場内に溢れる。(中略) 島人たちはあちこちに提げたく不幸>という名の禍々しい光を放つランプに体当たりを食らわず秋の虫を映画の続きを見る思いでみつめている……(齋藤 2009: 9-10)。

^⑩ もっとも、母との再会を念じて歌手になるのだが、その目的は果たせなかったり（『⑥青空天使』）、美空の歌という利権をめぐる騒動が起きたり（『⑥青空天使』『⑩泣きぬれた人形』『⑮陽気な渡り鳥』）と、歌唱行為がプラスにならない場合もある。だが、物語とは連動しているため、これらの場合については△を付している。

その他、物語と連動しているものとしては、警察の追及を逃れるために歌でカモフラージュする場面（『⑩泣きぬれた人形』）、鞍馬天狗を救出するために歌で敵をひきつける場面（『⑪鞍馬天狗 角兵衛獅子』）、歌がきっかけとなって継母の父に自らの素性が露見するという場面（『⑭あの丘越えて』）がある。これらは、表3の「その他」の項に反映されている。

^⑪ 『②悲しき口笛』と『⑩泣きぬれた人形』においては、親ではなく兄が再会の相手となっている。

しかしながら、こうした読みの多様性を念頭に置きながらも、「一般的」に(あるいは「社会的」に)美空ひばりがどのように受容されたのかを理解しようとするにあたって、映画によって構築されるであろう枠組みを考察することは無意味ではないだろう。もし仮に『美空ひばり公式ウェブサイト』が言う「日本人の心を癒し、励まし、希望を与えるという大きな役割」^⑧があるとすれば、おそらくその一端をこれによって説明できるかもしれない。

いずれにせよ、こうした受容時における枠組みは映画だけに限られない。

今後、そうした多様性／重層性を視野に入れつつ、美空ひばりの受容について考えていきたい。

参考文献^⑨

- 板倉史明 2009 「視線と眩暈——美空ひばりの異性装時代劇」四方田犬彦、鷲谷花編『戦う女たち 日本映画の女性アクション』東京：作品社、56-83。
- 井上ひさし 1990 「孤児院で聞いた『悲しき口笛』」文藝春秋編『美空ひばり “歌う女王”のすべて』東京：文藝春秋、6-23。
- 太田米男 2003 「美空ひばりの映画『青空天使』(1950)について」『藝術：大阪芸術大学紀要』26：144-158。
- 小川順子 2006 「チャンバラ映画と大衆演劇の蜜月——美空ひばりが銀幕で果たした役割」『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』第33集：73-92。
- 川本三郎 1993 「今ひとたびの戦後日本映画12 『働く子ども』のけなげさ」『世界』579号(通号)：338-347。
- 齋藤慎爾 2009 『ひばり伝 蒼穹流謫』東京：講談社。
- ひばりプロダクション編 1958 『七彩の虹：美空ひばり芸能生活十周年記念写真集』東京：那須書店。
- 柳真沙子 1958 「ひばりの十年とその役割」『キネマ旬報』1017号(通号)：64-68。
- 山根貞男 1990 「悲しき口笛(フィルモグラフィ スクリーンのひばりは永遠に輝く)」文藝春秋編『美空ひばり “歌う女王”のすべて』東京：文藝春秋、215。
- 油井正一 1958 「美空ひばり論」『ジューク・ボックス』第三号。再録：ミュージック・マガジン編『Noise』2号：42-49。
- ワイズ出版編 2005 『女優 美空ひばり 東映映画出演作品集』東京：東映ビデオ。
- 著者不詳 1949 「エノケンの底抜け大放送(日本映画紹介)」『キネマ旬報』814号(通号)：47-48。
- 著者不詳 1949 「のど自慢狂時代(日本映画紹介)」『キネマ旬報』790号(通号)：27-28。
- 著者不詳 1950 「ホームラン狂時代(日本映画紹介)」『キネマ旬報』808号(通号)：29-30。

^⑧ 「ホーム」『美空ひばり公式ウェブサイト』(<http://www.misorahibari.com/>)。2010年5月14日13時27分受信。

^⑨ 参考文献・資料には巻末付録に関する文献・資料も含まれている。

参考資料

『青空天使』：台本（準備稿）、プレスシート

『唄祭り ひばり七変化』：台本（完成台本）

『黄金バット 摩天楼の怪人』：台本（準備稿）、プレスシート

『おどろき一家』：プレスシート

『戦後派親爺』：プレスシート

『放浪の歌姫』：台本（完成台本）、プレスシート

参考WEBサイト

「ホーム」『美空ひばり公式ウェブサイト』

(<http://www.misorahibari.com/>)。2010年5月14日13時27分受信。

巻末付録：美空ひばり出演映画（1949.01 - 1952.06）リスト

タイトル (公開年月日)	役柄	歌唱場面	美空による歌唱曲目
のど自慢狂時代 (49.03.28)	「のど自慢の出演者のひとりとして登場。和田肇(日活俳優、和田浩和の実父)のジャズ・ピアノにのってブギウギを歌い、出演場面は短かったが天才の片鱗を見せた」(『女優 美空ひばり』)		《セコハン娘》(『キネマ旬報』790号)
ラッキン 百万円娘 (49.06.07)	母は死に、父はシベリア抑留中で身寄りがいない。交通事故をきっかけに知り合った五人男に世話を受ける。最後には父が出現する。『びっくり五人男』の縮刷版。	趣味の一つを披露するかたちで歌を歌い、五人男の一人と交流が図られる／父がいない気持ちちを歌で表現する	♪OR? 歌は楽しい 歌は嬉しい 歌は私の宝よ / ♪OR? いつもいつでも一人きり / 《憧れのハワイ航路》 / 《ジャングル・ブギー》の替え歌 / 《新東京音頭》
踊る竜宮城 (49.07.26)	「河童ブギの少女」という役名のとおり、河童の扮装をして《河童ブギウギ》を歌うためだけに出演。	河童の国の宮殿(?) で開かれた宴の一部で歌う / 河童の子どもたちの集まり(?) で歌う	《河童ブギウギ》
金語楼の 子宝騒動 (49.10.10)	子沢山家族(十三人兄弟)の末っ子。家計が苦しいために叔母のうちに養子に出される。『あきれた娘たち』の縮尺版。	家族との別れの場面で別れの歌を歌う / 母の臨終に際して歌い、一同が悲しみに包まれる	♪OR? 別れるときでも泣いてはダメよ / ♪OR? 夢にまさぐる乳房はやさし
悲しき口笛 (49.10.19)	両親はなく、唯一の肉親である兄は外地にいます。浮浪児だったが、バラックに住む父娘の生活に仲間入りする。最後には、兄が出現する。	居候先の娘と歌を通じて楽しい時間を過ごす / 居候先の男の失明時に歌で見舞金を稼ぐ / 歌によって兄が現われる	《悲しき口笛》 / 《ブギに浮かれて》? / 《別れのタンゴ》
おどろき一家 (49.12.13)	母子家庭の一人娘。一時は生活苦から母に捨てられるが、青年画家に拾われ、その後まもなくして母が戻る。母子は画家の姉の家に居候するようになるが、人間関係に苦労する。最後には画家の姉が改心して大団円を迎える。	「十分に音楽と唄を入れております。特に美空の唄うしりとり唄は現代の流行歌を全部織込んだのしいものです」(プレスシート)	

ホームラン狂時代 (49.12.13)	「ひばりは作曲家の古賀政男らと並んで本人として登場」(『女優 美空ひばり』)		
ヒットパレード (50.02.14)			
憧れの ハワイ航路 (50.04.01)	姉と二人暮らし。生活が苦しく花売り娘を している。そこへ母が現われるが、姉が母 の罪を難じて、受け入れない。最後には、 姉は態度を軟化させて母を許し、母子が一 緒になる。	歌うことで花の売り上げが上がった/ 「♪夜霧のかなたに澄み渡る」と落胆 を歌で表現/美空を救ってくれた恩人 との交流/一家団欒の場で歌を披露	〈ひばりの花売り娘〉/♪OR?夜霧のかなた に澄み渡る/♪OR?風に吹かれて消えてった ♪鐘が鳴るの出船はなおさびし/〈玄海ブ ルース〉/〈薔薇を召しませ〉/〈人は誰で も〉
放浪の歌姫 (50.04.09)	両親は健在だが、二人とも職を求めて大阪 へ行く。美空は取り残されたが、偶然知り 合った役者志望の二人とともに大阪へ。大 阪では生活のために喫茶酒場で歌を歌う。 最後には両親と再会が叶う。(完成台本)	役者志望の二人と歩きながら歌う/金 を稼ぐために喫茶酒場で歌う/役者志 望の二人に子守唄/放送局で歌う(完 成台本)	♪OR?今日から学校嬉しいな/〈二人は若い 〉の替え歌/〈私のボーイフレンド〉/〈涙の 紅バラ〉/♪OR?回る回るよ皆回る(完成台 本)
続・向う三軒 両隣 第三話 どんぐり歌合戦 (50.04.09)	気の弱い父と虚栄心の強い母のあいだに生 まれた一人娘。生活が苦しいため、生計の 足しにしようと納豆を売り歩く姿が父を改 心させる。	歌うことで納豆の売り上げが上がった /友だちの歓迎会で歌を披露/「♪毎 日聞こえたすずめの子」は感情表現?	♪OR?納豆 向こうの奥さんおはよう さん/〈流れの旅路〉/〈いききな燕も〉/〈 長崎シャンソン〉/♪OR?毎朝聞こえたすず めの子
エノケンの 底抜け大放送 (50.04.23)	キャスト一覧には「靴磨き」として配役さ れているが、あらすじには記述がない。(『キ ネマ旬報』814号)	「榎本先生が放送局の人になって、私 がマイクの前で歌う」(『七彩の虹』)	
戦後派親爺 (50.04.26)	青空楽団(ほかに近江俊郎と奈良光枝)の 一人として特別出演。(プレスシート)		〈ボタンとリボン〉(プレスシート)
続・向う三軒 両隣 第四話 恋の三毛猫 (50.05.07)	気の弱い父と虚栄心の強い母のあいだに生 まれた一人娘。生活が苦しいため、生計の 足しにしようと納豆を売り歩く姿が母を改 心させる。	「♪毎日聞こえたすずめの子」は感情 表現?/歌は納豆がよく売れるきっか けになる/映画のエキストラ(「美空ひ ばり」の代役)でギャラを手にする	♪OR?毎朝聞こえたすずめの子/♪OR?納 豆 納豆 向こうの奥さんおはようさん/〈 煙草の煙〉/〈席くな小鳩よ〉/〈三味線ブ ギ〉

青空天使 (50.05.20)	父はなく、母と逸れた少女。歌唱力ゆえに、天才ともてはやされ、収容所をめぐって騒動となる。最後は母と再会を果たす。(準備稿)	孤児収容所から脱する術となる／「天才少女」という利権をめぐる騒動の発端となる／舞台で歌う(準備稿)	<青空天使>／<ひばりが唄えば>／<愛と星とともに>(プレスシート)
東京キッド (50.09.09)	病身の母と二人暮らし。父が現われるが、母は父を拒絶したまま他界。(美空は)母の遺志を継いで父を拒み、偶然知り合った女に居候する。だが、女も死んでしまい、彼女を好きだった男に居候する。最後には父を受け入れる。	歌を通して共同生活をする男との交流が図られる／流しをして収入を得る／ホームレス生活のコーコマで歌う	<トンコ節>／<悲しき口笛>／<ひばりが唄えば>／<みなし子の歌>／<湯の町エレジー>／<東京キッド>／<名残惜しんで振り返る 優しいおおさんお友達 (く浮世船路)>?)
左近捕物帖 鮮血の字型 (50.12.02)	流しの姉妹の妹。だが、その正体は悪臣たちに命を狙われている細川家の跡取り。最後にはお家騒動が終わり晴れて帰国がかなう。	流し／美空の歌がBGMとなってエンディング	<ちゃっかり節>(クレジットでは<ちゃっかり小唄>)／<誰か忘れん>
黄金バット 摩天楼の怪人 (50.12.23)	特別出演。悪の一味にさらわれる子どものも友だち役。出演は全191場面中6場面。(準備稿)	友だち同士の遊びとして歌を披露	主題歌～曲名不詳(プレスシート)
とんぼ返り 中道 (50.01.03)	寺の鐘突き老人に拾われた身。母が現われるが、老人に義理立てして母を追い返す。だががやはり母は恋しく、母の元へと旅立っていく。	道中の「鼻歌」／道中で金をスラれたために旅芸人一座の一員となって糊口を稼ぐ／エンディングは出演者たちが歌いながら母のいる越後へと向かう	<越後獅子の唄>／<紺屋高尾>／<唄入親音経>／<あきれたブギ>／<日舞共奴>
父恋し (51.03.08)	許されぬ恋で生まれた娘。祖父と二人暮らし(母は出稼ぎ中)のところへ、父が現われる。父は自らの出世後の再会を望み、立ち去る。最後には、父が成功するのだが、映画は父の死を暗示して終わる。	歌声がまだ見ぬ父を引き寄せる／父が作曲したコンクール一位入賞作を歌う	<私は街の子>／<父に捧ぐる唄>

<p>唄 ひばり七変化 (51.04.21)</p>	<p>親はなく、兄妹の貧乏二人暮らし。兄の不在時に、(美空は)知り合った女に居候する。兄によって探し出されるが、悪党に誘拐されてしまふ。兄は取り返すべく悪党に加担する。最後には、兄が警官に銃撃されて、息を引き取る。</p>	<p>美空の歌唱シーンの寄せ集め (全14曲) : <河童ブギウギ> / <悲しき口笛> / <東京キッド> / <みなし子の歌> / <トンコ節> / <湯の町エレジー> / <ちっちゃかり小唄> / <日舞共奴> / <紺屋高尾> / <越後獅子の唄> / <私は街の子> / <父に捧ぐる唄> / <泥んこブギ> / <愛の明星> (完成台本)</p>
<p>泣きぬれた人形 (51.05.19)</p>	<p>親はなく、兄妹の貧乏二人暮らし。兄の不在時に、(美空は)知り合った女に居候する。兄によって探し出されるが、悪党に誘拐されてしまふ。兄は取り返すべく悪党に加担する。最後には、兄が警官に銃撃されて、息を引き取る。</p>	<p>卒業式で総代として歌う / 居候先の老人と歌で交流 / 兄との再会が歌によって果たされる / 密造団のバーで歌われる</p>
<p>鞍馬天狗 角兵衛獅子 (51.07.12)</p>	<p>みなしごであるために、角兵衛獅子になる (少年役)。親方に暴力を振るわれる日々を送るが、鞍馬天狗と知り合い生活が変わる。</p>	<p>角兵衛獅子姿で太鼓を叩きながら歌う / 鞍馬天狗を救出するために、歌で門番の気を引こうとする / 野原で遊びながら歌う</p>
<p>母を慕いて (51.07.27)</p>	<p>養父母と暮すところへ実母が出現。実母の元に引き取られ、舞妓生活が始められる。だが、父 (母とはすでに別れている) が母子を引き離す。その後、実母は病死。一方、始めのうちは意地悪だった継母は誤解を解き、(美空を) 受け入れる。</p>	<p>友人と歌い楽しいひととき / 船上で別れを歌で表現する / 関係者の推薦によって音楽イベントに出演 / 実母が恋しい気持ちで歌で表現 / 実母の死に際しに日舞を披露 / エンディングで共演者と歌う</p>
<p>ひばりの唄 子守唄 (51.09.21)</p>	<p>両親の離婚によって離れ離れになった双子姉妹 (一人二役)。偶然の出会いにより互いの存在と片親の生存を知り、二人は家族揃って暮らせるように奔走する。</p>	<p><おさげとまきげ> / <父恋し母恋し></p>
<p>鞍馬天狗 鞍馬の火祭 (51.10.12)</p>	<p>元・角兵衛獅子 (少年役)。ほとんど歌うためだけに数シーンに登場するのみ。</p>	<p><涙の越後獅子> <青空小唄></p>

<p>あの丘越えて (51.11.01)</p>	<p>母の死により、田舎に預けられて育った。父の出現で、都会で継母と三人暮らしになる。だが、継母の父に実の孫でないことを知られ激怒される。入水自殺未遂するも、最後にはみんなが迎えに来て元の轎に収まる。</p>	<p>継母の父と仲良くなるきっかけとして／家計を助けるために流しをする／労働者に詰め寄られる父の窮地を歌で救う／実母作の歌を歌い、継母の父に実の孫でないことを知られる</p>	<p>＜あの丘越えて＞＜街に灯がとぼる頃＞＜夢の花かげ＞</p>
<p>陽気な渡り鳥 (52.01.01)</p>	<p>孤児。養父母に邪魔者扱いを受ける。旅芸人の一座に加わり、最後には実父が現われる。</p>	<p>歌によって一座に加えてもらう／歌で一座の危機を救う／レビュー・ショー(=エンディング)</p>	<p>＜涙のはぐれ鳥＞／＜南京豆売り＞／＜とおりゃんせ＞／＜陽気な渡り鳥＞／＜アルルの女＞をBGMにレビュー／レビュー化した＜忠信の踊り＞？</p>
<p>鞍馬天狗 天狗廻状 (52.03.27)</p>	<p>元・角兵衛獅子(少年役)。</p>	<p>角兵衛獅子姿で太鼓を叩きながら歌う</p>	<p>＜旅の角兵衛獅子＞／＜みなしごの夢＞ (後者は歌われず?)</p>
<p>月形半平太 (52.05.29)</p>	<p>若武者に恋心を抱く舞妓。</p>	<p>座敷に呼ばれて歌い踊る／好きな男に歌を聞かせる</p>	<p>＜月形半平太の歌＞／＜春雨＞／＜祇園夜曲＞</p>

(凡例～♪：曲名不詳。歌い出しの歌詞を明示／♪OR?：曲名不詳。映画のオリジナル曲と考えられる歌で、その歌い出しを明示／＜曲名＞：美空の持ち歌／＜曲名＞：美空の持ち歌以外の歌)